

鶴見和子さんをみとった妹 記録を自費出版

死見据えた日々克明に

「ひんが死ぬとは、どういふことか。私をフィールドワークせよ」と姉はいました。姉とは、脳出血後の左半身不随と闘いながら、書き、語り続けた、社会学者で歌人の鶴見和子さん。06年7月31日、88歳で亡くなった。その最後の走りを見届けた妹・内山章子さん(80)が、看取りの記録『鶴見和子病床日誌』を三回忌に寄せて自費出版した。(河合真帆)



鶴見和子さん

から姉のベッドサイドで、内山 思え目覚めれば 朝の日は差す さんの中型の画帳に、「なんで まだ生きてあり」ほか詠草の記 も」記した。内山さんができな 録も。

いときには鶴見さんの弟で哲学者の鶴見俊輔さんの妻や、内山 と姉は饒舌でした。42年に日米 さんの長女、次女が書き、ひと 交換船で帰国したころのこと、 月余りで3冊に。死を見据える 父が倒れる前夜の記憶など、私 が知らなかったことを事細か に」。父は、元厚相で作家の鶴 見祐輔氏。

鶴見さんは95年に脳出血で昏倒し、97年から京都府宇治市の高齢者施設で自立した生活を送ってきた。しかし、06年5月に背骨を圧迫骨折。以降、徐々に衰弱していったという。

「死にゆく人がどんな歌を詠み、何を考え、何を思っただけゆのかを、あなたは客観的に記録しなさい」。入院した翌日、鶴見さんは内山さんに告げた。6月20日のことだ。この日

6月21日。医師の所見。「予断を許さない状態」
6月22日。昼食 かき卵汁 (ほか) 一時間半かけて食べ (略) 今日は一日短歌の日であった。昨日の夜死ぬかと



「姉は美しかった。亡くなくてもきれいでした」と語る内山章子さん=東京都世田谷区



鶴見和子病床日誌

表紙に、姉にもらった大切にした鳥の人形のイラストをあしらった

「死ぬっておもしろい。こんなの初めて」兄と大笑い

6月26日。大腸癌が確認される。リンパ節に及ぶ、との医師の所見。兄との約束(略)告知はしない。(略)心不全気味ということになる。
7月1日。すべウトウトする。声に力がない。4日。この日か和歌も出来ない。
7月5日。「朝の光が見えて嬉しい」「生きていくことの確認」と呟く。

7月13日。「歌が出来た」という。(略)「ここで死ぬか部屋に帰って死ぬか 主治医にさえも 私にさえもわからない目覚めれば人の声するまだ生きてをり」「これが最後になるか」と呟く。
「うなぎがたべたい」「キチツと座りたい」と要求する日も。一日眠る日もあった。

7月24日。〈そよそよと宇治高原の梅雨晴れの風に吹かれて最後の日々を妹と過ごす〉
「私にしては静かすぎるかな?」と辞世の歌を詠う。夜。「もう終りだと思おうの(略)ありがとうございました。私の空色の着物は簞笥にあります。お別れの写真も……」
翌朝。「昨日の遺言はお笑いね」「私の計画通り死ねなかつたワ」。同夕。点滴を尿避。「止めて下さい。ばかばかしい。もう終りです」
その後の俊輔さんとの会話を内山さんは忘れることができない。「死ぬっておもしろいこと

ねえ。こんなの初めて」と姉がいい、兄は「そう、人生とは驚くべきものだですって。2人で大笑いしてるの」
7月27日。「私の骨は私が神戸の海に撒きますから」。居合わせた医師に、和歌山の神島と民俗学者・南方熊楠の由縁について話した。
そして31日。「貞子さん(俊輔さんの妻)がきれいな朝ですわね」というと姉は「そうねえ」。血圧が下がり始める。正午。俊輔夫妻、内山さんら家族が臨終を見守った。

駄々っ子みたいに介護者を困らせました。早く死にたい早く死にたくない……という歌も残る。だが2年たって記録を見返し、気づいたことがある。鶴見さんは「すまないね」「ごめんね」とは言わなかった。いつも「ありがとう」だった。「いつも満面の笑みで感謝してくれた。だからまた何かしてあげたい、そう思っていました」

「お姉様よぐんははられませんでした」といつたら、「ハイ」。これが最期のことばです。がんばったんです、姉は。よく生きたいとのよき死でした。それを子や孫に伝えたい。兄に選んでもらって親交のあった方々にも、と。それが出版の動機です。年譜や内山さんのエッセーなどを含めて約2000ページ。私家版として500部刷って、近親者に贈る。